

## 学位論文の要旨

学位の種類	博士	氏名	阿部 泰之
<p>学位論文題目</p> <p>ケア・カフェ®が地域連携に与える影響—混合研究法を用いて</p> <p>共著者名：堀籠淳之，内島みのり，森田達也</p> <p>Palliative Care Research 平成27年1月下旬から2月中旬 掲載予定</p> <p>研究目的</p> <p>医療介護福祉領域間の、特に現場におけるバリアをなくすため、旭川において2012年に「ケア・カフェ®」という取り組みが始まった。ケア・カフェ®は著者の阿部が開発したものであり、地域において、「顔の見える関係」を創出することで、地域ケアの向上を意図した取り組みであり、また、そのノウハウを広く公開して一地域に留まらないという点で新規的である。しかしながら、ケア・カフェ®により、地域の医療・介護・福祉間の連携がどのように変化しているのかは探索されていない。</p> <p>本研究の主目的は、ケア・カフェ®を行うことによる、医療介護福祉従事者間の連携に関する変化を検証することである。副次的目的はケア・カフェ®の参加者が感じたことを明らかにすることである。</p> <p>方法</p> <p>本研究は、ケア・カフェ®に参加した医療介護福祉従事者を対象とした質問紙による前後比較研究である。医療介護福祉従事者間の連携に関する変化を、介入前後で医療介護福祉の地域連携尺度を用いて測定し、あわせて、介入後の自由記載を質的に分析した。旭川医科大学倫理委員会の承認を得て行われた。</p> <p>全国開催支援期間内にケア・カフェ®が4回施行された9地域において、その前後で医療介護福祉の地域連携尺度の全ての項目を含んだ調査用紙を配布した。</p> <p>主要評価項目を医療介護福祉の地域連携尺度の点数の変化とし、合計点数および下位尺度得点について、対応のあるt検定で比較した。効果量を求め、Cohenの基準に従い評価した。また、後調査の質問紙自由記載として、ケア・カフェ®に参加してよかったこと、自分や地域の変化、参加の負担を聞き、その内容について、3名の研究者がSCAT (Steps for Coding and Theorization) 用いて独立して内容分析を行い、3名の抽出概念を突き合わせたものを質的分析の結果とした。</p>			

## 結 果

前調査の質問紙配布数は273、回収数は181、後調査の質問紙配布数181、回収数は95であった。そのうち回答が完全であった71（前調査の質問紙配布数を分母とした有効回答率：26%）を解析対象とした。回答者のケア・カフェ®への参加回数は平均2.6±1.2回であった。

地域連携尺度は、合計点数（3.24→3.51点）および、【地域の他の職種の役割が分かる】（3.30→3.60点）、【地域の関係者の名前と顔・考え方が分かる】（2.67→3.01点）、【地域の多職種で会ったり話し合う機会がある】（3.11→3.45点）、【地域に相談できるネットワークがある】（3.43→3.80点）の下位尺度の点数が、ケア・カフェ®後に有意に上昇していた。効果量は0.32-0.36であり、Cohenの基準によれば中程度の効果量を持っていた。【他の施設の関係者と気軽にやりとりができる】【地域のリソースが具体的に分かる】の下位尺度の点数は、ケア・カフェ®後に上昇を認めたが、有意な変化ではなかった。

自由記述は61件抽出された。SCATのプロセスを踏んで概念化された大項目を含んだストーリーラインを以下に示す。

ストーリーライン：医療介護福祉分野の【専門細分化が進行し、各職種間のバリア】がますます高くなっている。また、お互いの仕事内容が分からなくなっている。普段の【人間関係は窮屈】であるが、かといって、仕事外、日常生活外の別のコミュニティに参加する【時間的・心理的余裕もない】のが現状である。そんな中、ケア・カフェ®は【参加しやすく】、【癒され、元気をもらえる】雰囲気があり、多くの人が【楽しめる】場である。ケア・カフェ®では、普段は話せない【色々なことを話すことができ】、参加者同士の【顔の見える関係が作られる】。多職種がミックスされていることにより、【新たな情報や知識が得られる】とともに、【他職種についての理解が深まる】。また、【対話の重要性】や、【思考・視点の多様性】への気づきといった【メタ視点を獲得する】人もおり、既に知り合いであっても、【人間関係が深まる】ことがある。これらは、参加のバリアが低いこと、大きなテーマのため会話の内容が限定されないこと、【職種によるヒエラルキーが払拭されている】といった、ケア・カフェ®が備えている仕掛けが影響していると思われる。また、【SNSの活用】による即時的な情報共有が時代に合っているという意見もある。ケア・カフェ®に参加したことで、依頼が増えた、在宅の件数が増えたといった【仕事に活かされている】例や、人脈や新たなネットワークが増えた人がいる。これは【社会関係資本の構築】と言い換えていいだろう。なかには大学で学び直すきっかけとなり、【人生の転機】となった人もいる。

## 考 案

地域においてケア・カフェ®を行うことにより、地域における医療介護福祉の連携が改善することが明らかとなった。我が国において地域包括ケアシステムの旗のもと、特に医療と介護、福祉の連携が叫ばれているが、依然としてこのシステムが何を指すのか十分に理解が得られていない。また、そのアウトカムに関する研究成果もほとんどない。国際的にみても地域連携（integration）に関わる介入と、その後の影響をアセスメントするツールはなく、その指標を明確にしている研究はほとんど存在しない。本研究は、ケア・カフェ®とい

う方法が明確化され、かつ汎用性の高いツールを用いた地域介入の成果を、地域連携そのものを測ることのできる評価尺度を用いて検証したという点で稀有であり、意義が大きいと考えられる。

地域連携尺度において有意な変化をした下位尺度を見ると、ケア・カフェに参加することにより、参加者は他の職種の役割や、名前と顔や考え方が分かり、気軽なやりとりができるようになっていた。また、地域の多職種で話し合う機会や相談できるネットワークを得ていた。施設間でのやり取りや、具体的なリソースの理解といった比較的リジッドな連携については変化が少なかった。同じことは、自由記述のから得られた【顔の見える関係が作られる】【他職種についての理解が深まる】【職種によるヒエラルキーが払拭される】【人間関係が深まる】などの概念でも説明可能である。

主に質的研究の結果から、地域連携を促進する目的を持った会で参加者が得られるものは、多職種の連携だけではないということが明らかになった。ケア・カフェ®に来ることにより、参加者は楽しさ、癒し、元気をもらって帰り、また、思考の多様性、対話の重要性といったコミュニケーションにおけるメタ視点を獲得する人もいた。これは裏を返せば、このようなコミュニケーションを味わえる場所が他になく、繋がる場所や機会を社会が希求しているということだと考えられる。専門職である前に人と人を繋ぐ空間や仕掛けを作ることが、地域連携促進の近道なのかもしれない。

## 結 論

医療介護福祉従事者間の連携に関する変化を、ケア・カフェ®を地域で開催するという介入の前後で地域連携尺度を用いて測定し、あわせて、介入後の自由記載を質的に分析する混合研究法で行った。地域連携尺度の点数は、有意に上昇し、中等度の効果量を持っていた。ケア・カフェ®に参加することにより、多職種の顔の見える関係を作るという本来の目的以外にも、多様な成果を得ていることがわかった。ケア・カフェ®は、地域における医療介護福祉間の連携を改善する有用なツールである。

## 引用文献

- 1) Imura C, Morita T, Kato M, et al. How and why did a regional palliative care program lead to changes in a region? A qualitative analysis of the Japan OPTIM study. *J Pain Symptom Manage.* 2014 May;47(5):849-59.
- 2) 大谷尚. SCAT:Steps for Coding and Theorization—明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. *感性工学* 2011; 10:155-60.
- 3) 筒井孝子. 地域包括ケアシステム構築のためのマネジメント戦略 integrated care の理論とその応用. 中央法規, 東京. 2014, p 129

## 参考文献

- 1) 阿部泰之, 森田達也. 「医療介護福祉の地域連携尺度」の開発. *Palliative Care Research* 9 (1) : 114-20, 2014
- 2) 堀籠淳之, 阿部泰之. 医療者・介護者・福祉者のためのケア・カフェー Blending Communities—. *Palliative Care Research* 9 (1) : 901-5, 2014

## 学位論文の審査結果の要旨

報告番号	第 号		
学位の種類	博士(医学)	氏 名	阿部 泰之
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>審査委員長</p> <p>西條 泰明 </p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>審査委員</p> <p>柿崎 秀宏 </p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>審査委員</p> <p>大田 哲生 </p> </div> </div>			
<p>学 位 論 文 題 目</p> <p>ケア・カフェ®が地域連携に与える影響 —混合研究法を用いて</p>			
<p>地域で生活する患者や要介護者を支えるためには、医療や介護、福祉が連携していくことが必要である。しかしながら、これらの職種間には心理的な、また実際的な障壁があり、連携は進んでいない。</p> <p>本研究の主目的は、医療介護福祉従事者間の、特に現場においてのバリアをなくす取り組みであるケア・カフェ®を地域に適用することにより、地域の連携がどのように変化するか調査することである。副次的目的はケア・カフェ®の参加者が感じたことを明らかにすることである。</p> <p>ケア・カフェ®の参加者を対象とした質問紙による前後比較研究を行った。研究期間中に初めてケア・カフェ®が行われるようになった全国9地域が対象となった。医療介護福祉の地域連携尺度の点数変化の解析、質問紙の自由記載の内容分析を合わせて検討する混合研究法を用いた。質的分析には、小規模データの分析に優れるSCAT: Steps for Coding and Theorizationを用いた。</p>			

前後の質問紙への回答が完全であった71名が解析対象となった。地域連携尺度の点数は、合計点数および4つの下位尺度において有意に上昇し、その効果量は0.32-0.36であった。有意な変化のあった下位尺度自由記載の内容分析において、参加者はケア・カフェ®に参加することにより、多職種顔の見える関係を作るという本来の目的以外にも、癒しの場、コミュニケーション上の気づき、社会関係資本など多様な成果を得ていることがわかった。

医療介護福祉従事者間の連携に関する変化を、ケア・カフェ®を地域で開催するという介入の前後で地域連携尺度を用いて量的に測定し、あわせて、介入後の自由記載を質的に分析する混合研究法で行った。ケア・カフェ®は、地域における医療介護福祉の連携を改善する有用なツールである。

本論文は適切に構成され、適切な考察もなされている。また、本論文で使用する調査票作成についての論文は既に掲載されており、本論文もPalliative Care Research誌に掲載済みである。

論文提出者は各審査委員による本論文の内容及び関連領域についての諮問には適切な応答が得られ十分な学力を有することが示された。

以上より、審査委員会は本論文を学位論文として適切なものであると判断した。